







学位論文審査の結果及び最終試験の結果の要旨

学位申請者氏名	霜野 良介	
学位論文名	咬合低下モデル動物に咬合挙上を施した後の咬合高径の経日的変化 (Temporal changes in occlusal vertical dimension after bite-raising in bite-reducing model animals)	
論文審査委員	主査：	松本歯科大学病院 教授 山田 一尋 
	副査：	松本歯科大学 教授 田口 明 
	副査：	松本歯科大学 准教授 田所 治 
	副査：	
	副査：	
	副査：	
最終試験	実施年月日	2018年7月31日
	試験方法	口答
学位論文の要旨		
<p>目的：咬合低下モデル動物に咬合挙上を施した後の咬合高径の調節機構を検討する。</p> <p>方法：4週齢の Hartley 系雄性モルモットを用いた。実験1では咬合低下を行った4匹を低下群とし、低下装置（以下に示す）の装着を行っただけで咬合低下を行わなかった4匹を対照群として用いた。また実験2では咬合低下後に咬合挙上を行った7匹を実験群とし、低下のみを行った6匹を低下のみ群、また低下装置の装着を行っただけで咬合低下や咬合挙上を行わなかった6匹を対照群として用いた。動物の咬合高径を計測するためマイクロ CT 撮影を顎間ゴム装着前、顎間ゴム撤去後、挙上装置装着前と装着後、挙上装置撤去後0日目、1日目、4日目、7日目、11日目、14日目、18日目、21日目に行った。前頭面で左右のオトガイ孔の最下縁の midpoint と切歯孔上縁を結んだ直線の長さを咬合高径として計測した。</p> <p>結果と考察：実験1では、対照群の組織像と実験群の組織像ともに、根尖相当部に炎症反応を示す所見は観察されず、萌出障害も生じていないことを示唆された。また実験2から、一度低下により維持された咬合高径はその後、挙上を行ったとしても生来のものではなく、低下後の咬合高径が維持されることが示された。</p>		
学位論文審査結果の要旨		
<p>歯科医療においては、咬合の回復および誘導、新しい咬合の設定など咬合に関する治療が盛んに行われており、適切な咬合高径の設定が重要である。適切な咬合高径の設定する病態生理学的メカニズムを知るために、咬合高径を変化させた場合の生体反応を明らかにすることが必要とされている。</p> <p>本研究の結果から、成長期に一度咬合高径が低下して維持された場合、生来の咬合高径が高いと認識され、低下により維持された咬合高径となるまで歯の削合量が萌出量を上回っている可能性が示され、今後の咬合高径設定の病態生理学メカニズム解明の一助となることが示唆された。</p>		

最終試験結果の要旨

学位論文に用いられた方法論、得られた結果、結論、論文の論点も含めて十分な解答が得られ、博士課程修了にふさわしい知識を有していたことから、最終試験を合格と判定した。

判 定 結 果

合格

不合格

備考

- 1 学位論文名が外国語で表示されている場合には、日本語訳を()を付して記入すること。
- 2 学位論文名が日本語で表示されている場合には、英語訳を()を付して記入すること。
- 3 論文審査委員名の前に、所属機関・職名を記入すること。